

健康について

- 熱があったり、具合が悪いときは、お子さんにとって集団での保育が負担になります。朝、健康状態を必ず確かめてください。（乳児は朝、必ず検温してください）
- 「外遊びを控えてほしい」という要望は、職員の体制上、室内にお子さんだけ残しておくことができないため、お受けできません。
- 「何℃で一度連絡がほしい」など、園からの連絡に対して要望がありましたら、担任までお知らせください。
- 熱が高い場合や、右のような症状が見られる場合、お迎えをお願いすることがあります。

- ・37.5℃の発熱がある。
- ・機嫌が悪く、泣いてばかりいる。
- ・食欲がなく、水分もとれない。
- ・元気がなく、だるそうにしている。
- ・眠りが浅く、すぐに目覚めてぐずる。
- ・顔色が悪い。
- ・その他、普段の状態に比べ、異常が認められるとき。

予防接種について

子どもは病気にかかりやすく、かかると重くなる事があります。それを防ぐために免疫を作り、感染症から身を守る事が大切です。予防接種を受けて免疫を持つことは、流行を防ぐことにもなります。

ワクチン名	接種回数	対象年齢
BCG	1回	1歳未満（生後5～8か月未満が望ましい）
四種混合（ジフテリア・破傷風・百日咳・ポリオ）	1期初回 21日から56日の感覚で3回	生後3か月～7歳6か月未満 1期初回は生後3か月～1歳までが望ましい
二種混合（ジフテリア・破傷風）	1期追加…6ヶ月以上あけて1回 ※1年から1年半が望ましい	生後3ヶ月～7歳6ヶ月未満
麻しん 風しん混合 麻しん（単） 風しん（単） ※基本的には混合	1期…1回	満1歳～2歳未満
	2期…1回	平成25年4月2日～平成26年4月1日生
	3期…1回	平成13年4月2日～平成14年4月1日生
	4期…1回	平成10年4月2日～平成11年4月1日生
日本脳炎	1期初回…6日から28日の間隔で2回	満3歳～7歳6ヶ月未満
	1期追加…おおむね1年して1回	
	2期…1回	満9歳～13歳未満
ヒブ(Hib) （細菌性髄膜炎）	生後2ヶ月～7ヶ月…4回 生後7ヶ月～1歳…3回 満1歳～5歳児未満…1回	生後2ヶ月～5歳未満
小児用肺炎球菌 （細菌性髄膜炎）	生後2ヶ月～7ヶ月…4回 生後7ヶ月～1歳未満…3回 満1歳～2歳未満…1回 満2歳～9歳…1回	生後2ヶ月～9歳未満
B型肝炎ワクチン	4週間隔で2回 さらに1回目の接種から20週以上経って1回の計3回	生後2か月～
水筒（みずぼうそう）ワクチン *必ず2回受けてください。	1歳～1歳3か月・・・1回目 1回目から、6か月～1年の間隔をあけて2回目	1歳～2歳3か月
ロタウイルスワクチン	ロタリックス 2回 経口摂取 ロタテック 3回 経口摂取	生後6週間～24週まで 生後6週間～32週まで *令和2年8月生まれ以降

*ロタウイルスワクチンは、2020年10月から定期接種されるようになりました。

認定こども園すくすく 感染症への対応策

こども園において予防すべき感染症の考え方

「学校保健安全法（旧学校保健法）」では、下記の疾患を学校において予防すべき感染症に指定しています。

第一種 エボラ出血熱、クリミア・コンゴ出血熱、痘そう、南米出血熱、ペスト、マールブルグ病、ラッサ熱、急性灰白髄炎、ジフテリア、SARS、及び鳥インフルエンザ（H5N1）

★出席停止期間の基準は「治癒するまで」

第二種 インフルエンザ（鳥インフルエンザ（H5N1）を除く）、百日咳、麻疹、流行性耳下腺炎、風疹、水痘、咽頭結膜熱、結核及び髄膜炎菌性髄膜炎、

★出席停止期間の基準は、感染症ごとに個別に定められており、症状により学校医その他の医師において感染の恐れがないと認めるとき。

第三種 コレラ、細菌性赤痢、腸管出血性大腸菌感染症、腸チフス、パラチフス、流行性角結膜炎、急性出血性結膜炎その他の感染症

★出席停止期間の基準は、病状により学校医その他の医師において感染の恐れがないと認めるとき。

また、下記の「学校保健安全法施行令」でこども園への対応を求めています。

- 園長は、感染症にかかっており、又はかかっている疑いがあり、あるいはかかる恐れのある児童等があるときは、政令で定めるところにより、出席を停止させることができる。
- 出席停止の期間は、感染症の種類等に応じて、文部科学省令で定める基準による。
- こども園の設置者は、感染症の予防上必要があるときは、臨時にこども園の全部又は一部の休業を行うことができる。

感染症の拡大を防ぐためにも、患児は、「他人に感染させる状態の期間は集団の場をさけること」「健康が回復するまで治療や休養の時間をとること」が必要。

基礎疾患がある園児への配慮

小児がんや白血病などの血液疾患、重篤な心疾患、腎疾患や膠原病のため免疫抑制剤や、ステロイドホルモンで治療中の児童は、感染症が重症化することがあるため注意が必要。具体的に担任や看護師は、主治医または保護者にどのような感染症に罹患すると重症化する可能性があるのかを事前に聞いておき、注意する疾患が学校やクラスで発生したら、すみやかに保護者に連絡を取ることが必要。

（水痘は、免疫抑制剤やステロイドホルモンで治療中の人感染すると重症化するので特に注意が必要）